

2026 年度 B 日程

国 語

(試験時間 60 分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 問題は〔Ⅰ〕の 1 題です。
受験者は、問題〔Ⅰ〕を解答しなさい。
3. この問題冊子は、7 ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページ落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. 解答用紙が 1 枚およびメモ用紙が 1 枚あります。
5. 試験終了後、問題冊子とメモ用紙は持ち帰りなさい。

〔I〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「どこの言語でもありません」

不意にテープが止まった。

「単なる雑音です」

母親が、えっ、と聞き返す間もなく言語学者は追い討ちをかけた。

「言葉でさえ、ないのですな」

老人はカードを束ね、大きな音を立てて机の引き出しに仕舞った。それで終わりだった。

研究対象としていた少数言語の収集に、何ら役立たないことが確認された途端、老人の表情は一段と無愛想になった。「そうですか……」とただつぶやくばかりの母親を慰める気配も、[※]お兄さんにいたわりの言葉を掛ける素振り^アも見せなかった。

唐突にお兄さんはバスケットの留め金を外し、例の点検をはじめた。ビー玉をつまみ上げ、クリップで親指を挟みかけたところで母親がお兄さんの手を握り、

「帰りの、汽車の中でやりましょうね」

と言った。

^aあの時の録音テープが残っていれば、と小父さんは残念に思った。たとえ言語学者のひどい咳に邪魔されているとしても、あそこには間違いなくお兄さんの言葉が記録されているはずだった。しかしそれは一度として再生されることもなく、キリンのカードほどにも大事にしてもらえないまま、手の届かないところへ消え去ってしまった。

地図にも載らないどこか遠い小島に暮らす、内気で善良な人々が息子の仲間ではないだろうか、という母親の願いは打ちクダかれた。小島の住人はお兄さん一人だった。けれどそこは決して荒涼とした不毛^イの地ではなかった。波は穏やかで、思索にふけるに相応しい木陰があちこちにあり、頭上では小鳥たちがさえずっている。そしていつでも小父さんが好きな時に、手漕ぎボート^b

トに乗って接岸することができる。

お兄さんの言語を知らない人に、それを再現して聞かせるのは、たとえ小父さんでも難しかった。分かることと、喋ることは別だった。カードの絵を当てるように、単語一つ一つを発音するのは可能だとしても、それは単なる断片に過ぎず、言語の全体を支える骨格と、根底を流れる響きの魅力をよみがえらせるのは不可能だった。

言語学者は雑音の一言で片付けたが、愚かとしか言いようがない。お兄さんの言語は乱雑さとは正反対にあった。文法は例外を許さない強固なルールに則って組み立てられ、語彙は豊富で、時制、人称、活用形なども整っていた。好ましい素朴さと、長い年月を費やして形成された地層のような安定と、思いがけない細やかさが絶妙に共存していた。

しかし最も特徴があるのは発音だった。音節の連なりには、誰も真似できない独特なヨクヨウと間があった。ただ単に独り言をつぶやいているだけの時でも、まるでお兄さん一人にしか見えない誰かに向って、歌をササげているかのように聞こえた。一番近いのは何かと聞かれれば、それはやはり、僕たちが忘れてしまった言葉、といつかお兄さんが言い表わした、小鳥のさえずりだった。

それほどの言語であつたのに、お兄さんは書き言葉を残さなかった。喋るだけで十分、紙に書く必要などない、という態度だった。逆に言えば、耳と目をつなぐ目印となるものがないままに、一つの言語を編み出したことになる。小鳥のさえずりだけをお手本に、お兄さんはただ一人、自分で自分の耳に音を響かせながら、小鳥に散らばる言葉の小石を、一個一個ポケットに忍ばせた。小鳥たちのさえずりからこぼれ落ちた言葉の結晶を、拾い集めていった。

当然ながら母親は、小島に接岸する小父さんの手漕ぎボートに同乗したが、できれば自分でオールを漕ぎたいほどの熱意を見せた。小島に上陸できるのなら、どんな努力もとわなかった。小父さんの手を借りながら、彼女は少しずつ息子の言語を覚えようとし、実際、最初の頃の訳も分からない状態からは脱したが、小父さんからすれば十分とは言いがたかった。彼女の耳は既に、語尾の微妙な変化を聞き分ける柔軟性を失っていたし、しばしば、こうあってほしいという願望を織り込んで、本来の意味をユガめる場合があつた。

それでも母親は、自分には息子の言葉が分かる、との自負^fを持つようになった。お兄さんの言っている意味が分からない時でも、分かった振りをした。振りを続けながら、本当は分かっているのだと自分に思い込ませた。

母親の間違いに気づいても、小父さんは訂正しなかった。例えばある時、

「チクチクするチョッキは嫌だ」

とお兄さんが言った。

「あら、そう？ 安物の苳^gだったからかしら」

と母親は答えた。チョッキと苳は、発音がよく似ているのだった。

「今度からは産毛をちゃんと洗い落とさなくちゃね」

あくまでも昨夜食べた苳について語る母親の言葉を背中で聞きながら、お兄さんは毛糸のチョッキを脱ぎ、タンスの引き出しの一番下に押し込めた。

あるいはお兄さんが、

「シャンプーはしない。髪が濡れると半分死んだ気持になるから」

と言った時は、母親は大きくうなずいて同意した。

「本当にそうねえ。あなたの言うとおり。夜遅くまで起きているのは、体に毒よ」

シャンプーと夜更かしの発音は、さほど似ているとは言えなかった。^⑤

小父さんもお兄さんも、母親に向って「間違っている」と言わなかった。どんなに形の違う小石でも、一緒にポケットに入れておくうち、不思議と馴染んでくるものだとよく知っていたからだ。兄弟はただ黙って、チョッキと苳とシャンプーと夜更かしの小石がカチカチと鳴る音に、耳を澄ませるばかりだった。

（小川洋子『ひとり』による、一部改変）

※ お兄さん——「小父さん」の七歳年上の兄。十一歳を過ぎた頃から、独自の言葉で喋りだすようになった。その言葉を理解できるのは「小父さん」だけである。

問一 傍線部あゝえのカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部アゝ工の漢字の読みを平仮名で書け。

問三 破線部①ゝ⑤のうち、呼応の副詞でないものはどれか、一つ選べ。

問四 傍線部a「あの時」を説明したものとして最も適当なものを、次のアゝオのうちから一つ選べ。

ア お兄さんとお母さんと三人で汽車に乗って小島に少数言語の収集に行った時。

イ 小島の言語を研究している言語学者によるお兄さんの言葉の調査に協力した時。

ウ 世間の脚光を浴びていたお兄さんの言葉の重要性を明らかにするための調査を受けた時。

エ お兄さんの言葉の単語カードを作ろうとしていた言語学者の作業に協力した時。

オ お兄さんの言葉がどこかの言語である可能性について言語学者に調べてもらった時。

問五 傍線部**b**「手漕ぎボートに乗って接岸することができる」とは実際には何ができるのか。最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア お兄さんの言葉に耳を傾け、その内容を理解することができる。

イ お兄さんの孤独な世界を感じ取り、優しく慰めることができる。

ウ お兄さんの楽しみである言葉遊びと一緒に楽しむことができる。

エ 心配性な母親の目を逃れ、子どもだけで時間を過ごすことができる。

オ お兄さんが住む小島で楽しい時間を一緒に過ごすことができる。

問六 傍線部**c**「言語の全体を支える骨格」とあるが、そのことを具体的に説明している一文を探して、最初の五文字を抜き出せ。（句読点も字数に含めること。）

問七 傍線部**d**「耳と目をつなぐ目印となるもの」とは何か。次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 語彙 イ 発音 ウ 身ぶり手ぶり エ 絵カード オ 文字

問八 傍線部**e**「小鳥たちのさえずりからこぼれ落ちた言葉の結晶を、拾い集めていった」とあるが、誰が何をするを言っているのか、本文の表現を用いながら六〇字以上七〇字以内で説明せよ。（句読点も字数に含めること。）

問九 傍線部 f「自負」とあるが、ここでの意味を説明したものとして最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 物事の責任が自分にあると考えていること。

イ 自分自身に対して哀れみの感情を抱いていること。

ウ 自分の行いや態度を振り返ってつつしむこと。

エ 自分の才能や知識などに自信を持っていること。

オ 自分の状態、能力などをわきまえていること。

問十 傍線部 g「分かった振りをした」のはなぜか、三十字以上四十字以内で説明せよ。(句読点も字数に含めること。)

問十一 本文の内容を述べたものとして適当なものを、次のア～カのうちから三つ、選べ。

ア 言語学者の評価を信じ、お兄さんの言語が無秩序で意味のないものだと思った母親は、お兄さんの言葉を理解することができなくなってしまった。

イ お兄さんの言語は、文法・語彙・発音において高度に体系化され、かつ「小鳥のさえずり」に近い、詩的で豊かな響きを持つものであった。

ウ 「小鳥」は、お兄さんの穏やかで豊かな言語の比喩であり、「接岸」は、お兄さんが一人で使用する言語を理解することを示すものである。

エ 母親は、はじめの頃こそ意味のとり違えも多かったが、懸命な努力により、お兄さんの言葉を理解することができるようになった。

オ 「地図にも載らないどこか遠い小鳥」は、思索にふけるにふさわしい穏やかな空間であり、誰も上陸してこないというお兄さんの安心を象徴している。

カ 母親は理解できない息子の言葉を「分かっている」と信じるようになったが、小父さんもお兄さんその誤解を訂正せず共存を受け入れている。

問十二 本文と同じく小鳥をモチーフとした作品には夏目漱石の『文鳥』などがある。夏目漱石の作品を、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 雁 イ 不如帰 ウ 吾輩は猫である エ 河童 オ 蠅

問十三 二重傍線部「地図にも載らないどこか遠い小鳥」とあるが、この「小鳥」のたとえをふまえて、あなたにとっての「小鳥」について、具体例を挙げながら三〇〇字以内で述べよ。（句読点も字数に含めること。）



二〇二六年度

一般選抜入試

前期B日程

メモ用紙

国

語

受験番号
